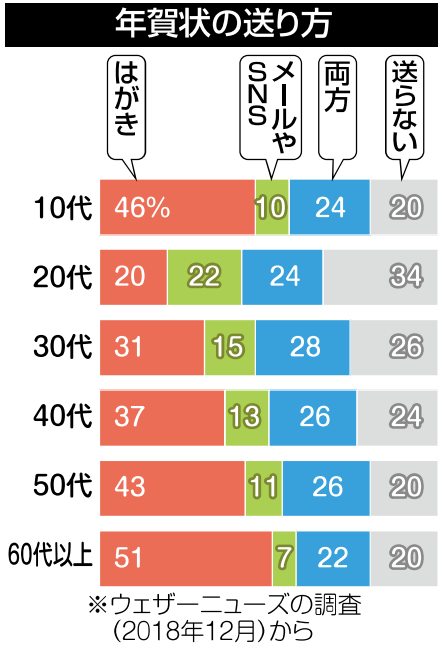


くらしの中から考える

新年のあいさつ

人は減っているようです。今年は新型コロナウイルスの影響で、新年に会えない人も多いのでは。皆さんは、どのように新年のあいさつをしようと思いますか？（吉田瑠里）

今年も残り1カ月を切りました。年賀状の準備を始めた人もいるでしょうか？近年、メールやLINEなど会員制交流サイト（SNS）の普及もあって、はがきの年賀状を出



日頃お世話になっている人や友人らと新年のあいさつを交わす習慣は、かなり古くからあったようだ。郵政博物館（東京）によると、七世紀には元旦に天皇が臣下からお祝いの言葉を受ける儀式が行われていた。平安時代の学者・藤原明衡がまとめた最古の手紙文例集には既に、年賀の手紙の例文も載っている。

郵便制度が始まった明治時代になると、鉄道などの交通網が発達し、人々の交流範囲は格段に広がった。時間的にも距離的にも年始めに全ての人と直接会ってあいさつするのが難しくなり、代わりに普及したのがはがきの年賀状だ。今のようなお年玉付きや寄付金付きの年賀はがきが登場したのは戦後の一九四九（昭和二十四）年。「戦争で離れ離れになった人に年賀状を出して安否を確かめ合おう。くじや寄付金を付ければみんなが買ってくれ、社会福祉にも役立つ」と

続けやすく見返せる

◆ はがきの年賀状

という民間人のアイデアから生まれた。今、両面の作成をパソコンやプリンターに任せても、一枚一枚手書きでメッセージを添える人もいるだろう。「差出人の言葉そのものが手に取れる形で届き、何年たっても、容易に見返せる良さがある」と語るのは同館学芸員の富永紀子さん（五十）。日本郵便の担当者「受け取った時、出してくれた相手を書いて温かい気持ちになる」と話す。

しかし、年賀はがきの発行枚数は二〇〇四年用の四十四億六千万枚をピークに減少傾向。二〇年用は二十四億四千万枚にとどまった。気象情報会社ウェザーニューズ（千葉市）が「昨年末、全国の約一万人に聞いた調査では、若い人ほどメールやSNSを使う傾向が目立った。「何も送らない」と答えた人も21%おり、「時間と手間をかけたくない」「住所を聞かなければいけないのがネック」との声が多かったという。情報教育に詳しい金城学院大教授の長谷川元洋さん（五十）は毎年百五十枚ほどの年賀状を送っている。ただ、〇五年の個人情報保護法施行後に知り合った学生には出していない。大学で住所録が配られなくなったからだ。メールやSNSを活用すれば「新年の零時零分に即時にあいさつでき、動画も送れる」と利点を挙げる一方で、スマートフォン機種変更などを機に普段の連絡も続かなくなる不

◆ メールやSNS

即届く動画も送れる

便さも感じているという。「はがきの年賀状の方が、普段あまり会ったり話したりしない人でもやりとりが長続きしやすい」と長谷川さん。「そもそも新年のあいさつは今関係がある人とメッセージを送り合うだけでなく、過去に知り合い、同じ時代を生きている人たちとのつながりを確認する機会になる」と話す。

皆さんの意見を送ってください。抽選で紹介したお子さんの中から紙面で図書カードをプレゼント。応募は〒460 8511 中日新聞（東京新聞）「学ぶ」係＝ファクス052(222)5284、メール＝seikatu@chunichi.co.jp＝へ。QRコードからワークシート兼応募用紙もダウンロードできます。18日締め切り。

